

グロリアとロジャーズの出会いおよびその後の関係 : グロリアの長女パメラの経験と追想が伝えるもの

SUETAKE, Yasuhiro / 末武, 康弘

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Bulletin of the Faculty of Social Policy and Administration :
Reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福祉研究

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

135

(終了ページ / End Page)

160

(発行年 / Year)

2010-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006474>

グロリアとロジャーズの出会いおよびその後の関係

—グロリアの長女パメラの経験と追想が伝えるもの—

末 武 康 弘

1. はじめに

2008年7月6日から10日にかけてイギリスのイーストアングリア大学 (University of East Anglia) で開催された、第8回パーソンセンタード・体験的心理療法とカウンセリングの国際会議 (8th International Conference for Person-Centered and Experiential Psychotherapy and Counseling: 略称 PCE2008) に参加するにあたって、私はそのなかに予定されていたひとつのプログラムにとっても強い関心を寄せていた。それは、フィルム「グロリアと3人のセラピスト」のクライアント役グロリア (Gloria) の長女パメラ (Pamela) さんが特別参加し、「グロリアのフィルムとともに生きて (Living with 'The Gloria Films')」と題する講演を行うという企画だった。また、国際会議PCE2008の開催直前には、パメラさんが講演とおなじタイトルの著書 (Burry, Pamela J., 2008) を出版したというニュースが、この会議を主催する国際学会WAPCEPC (World Association for Person-Centered and Experiential Psychotherapy and Counseling) のホームページに掲載された。

「グロリアと3人のセラピスト」(原題: Three Approaches to Psychotherapy) (Shostrom, 1965) は、1964年にアメリカ合衆国で企画・制作され、翌1965年に公開された、史上初の心理療法のデモンストレーション・ピクチャーであり、アメリカのみならず世界各地において心理療法の教材映像として視聴されてきた有名なフィルムである¹⁾。その内容は、当時のアメリカを代表する心理療法家、カール・ロジャーズ (Carl Rogers)、フレデリック (フリッツ)・パールズ (Frederick(Fritz) Perls)、アルバート・エリス (Albert Ellis) がひとりの女性の心理療法面接を行うというもので、そのクライアント役をつとめたのがグロリアという当時30歳を少し過ぎた女性だった。このフィルムが公開されて以降、心理療法の映像資料は他にも多々制作されてきたが、現在に至るまで最も多くの人々に視聴され、内容についての分析や議論が数多く行われてきたのはこの「グロリアと3人のセラピスト」であると言われている (Kirschenbaum, 2007, p.324)。

私がグロリアの長女パメラさんのPCE2008における講演に強い関心を寄せたのはなぜか。それは

このフィルムを視聴したことがある人であればわかるとおり、パメラさんは、グロリアがロジャーズとの面接の冒頭の部分で語った、あの「パミー」（パメラの愛称）だったからである。

日本語版のトランスクリプトから冒頭の一部を抜粋してみる。

グロリア 3 今日お話したい主なことは、最近わたしは離婚しまして、そして、以前、心理療法を受けたこともあるんですけども、治療が終わったときは気分が落ち着いていたんです。でも、前とちがって突然わたしにわかったことは、独身生活に適応するという問題なんです。特にわたしにとって困ることは、男性のことで、男の人を家に連れて来ることが問題で、それが子供にどんな影響を与えるかということが気になるんです。

お話したい一ばん大きなこと、いつも思っていて、お話したいことは、わたしには9つになる娘がありますけど、時どき情緒的な問題をいろいろもっているように思えるのです。娘を動揺させたくないし、娘に影響を与えることにとても気を使ってしまいます。混乱させたり、ショックを与えたりしたくない。・・・(中略)・・・

ロジャーズ 4 娘さんとのことがとても気になっていて、今まで2人の間は開放的だったけれども、そういう関係が消えてくような気がするんですね。

グロリア 4 はい、わたしは用心しなければいけないと思うんです。といいますのは、わたしが小さいとき、父と母が肉体関係をもっていることを知ったときに、きたない、恐ろしいことに思えて、しばらく母を好きになれなかったことがあるんです。でも、パミーに、娘なんですけど、嘘もつきたくないんです。どうしたらいいか、わからないんです。

(佐治ほか訳、1980、p.6)

このフィルムのなかでグロリアによって語られた娘パミー（パメラさん）が、フィルム制作から44年の時を経てロジャーズ派の心理療法の国際会議に登場するということに、私はとても興味を惹かれた。これまでも様々な議論（なかには憶測や疑念なども飛びかいながら）がなされてきたこのフィルムの内容やその後日談——特にグロリアとロジャーズとの関係²⁾——について、パメラさんから真相のいくつかを聞くことができるかもしれないと思ったからである。

しかし私のなかには、同時に、ある気がかりや疑問のようなものも感じられていた。それは、フィルムのなかで語られていたパミーというグロリアの娘の名前が、現実存在する人のものであった、ということについての違和感である。「まさか、グロリアも仮名でなく本当の名前だったのだろうか？」私は、このフィルムにおけるプライバシーの取り扱いについて、こうした疑問や懸念を抱えながらイギリスでのPCE2008に参加することになった。

私のなかに生じた気がかりや懸念は、的はずれなものではなかった。PCE2008に参加してほどなくわかったことだが、「グロリア」は実名であり、プライバシーの侵害やこのフィルムの使用権をめぐる、アメリカ合衆国では様々な問題が生じていたのだった。1960年代の終り頃には、フィルムの使用の制限を求めてグロリアさんから制作者のエヴァレット・ショストロム（Everett Shostrom：フィルムには司会・進行役として登場している）に対する訴訟が起こされ、その後裁判所がグロリアさんたちの主張を認めて、アメリカでは現在に至るまで、厳密な意味での教育研究上の目的以外には上映や視聴ができないということだった。PCE2008でも大会2日目の夜にこのフィルムを上映するプログラムが組まれていたが、そのことについてパメラさんが難色を示しているらしいという情報が流れ、一時取り止めも検討されたが、最終的には上映に漕ぎつけたといったハプニングも生じた。

そのようななかで、PCE2008の大会3日目の午前中にパメラさんの講演が開催された。私のなかにもともとあったもうひとつの関心——グロリアとロジャーズの面接、そしてその後の2人の関係の真相について何かがわかるのではないかというもの——は、パメラさんの講演、そして彼女の著書によってどのように満たされ、また心動かされ、推進されたのか。私は彼女の講演を聞き終えた後で、私自身が知り、感じたことについて何らかの形で書く必要がある、いや、書かなければならないと思った。PCE2008の終了後、日本に戻った私はパメラさんの著書を読み、そしてその著書のなかで触れられていた資料のうち入手可能なものを取り寄せた。これらの著作や資料を読み進めるなかから、グロリアとロジャーズ双方にとってのあの面接の意味やフィルム収録後の2人の関係について——様々な誤解や憶測が含まれたこれまでの論評とはかなり異なる——、その事実や真相が見えてきた。

2. 国際会議 PCE2008 におけるパメラさんの講演

PCE2008の3日目の午前に開かれたパメラさんの特別講演の会場には40～50人ほどの聴衆が集まった。PCE2008全体では300名を超す参加者がいたので、もっとたくさんの人たちがパメラさんの講演会場に詰めかけるのではないかと私は予想していたが（多数の研究発表が同時に各会場で行われていたことや、最終日にもパメラさんのおなじ講演が再度予定されていたといった理由からか）、興奮のなかでというよりも静かで落ち着いた空気、そして好奇の眼差しというよりも敬意と暖かさに包まれた雰囲気の中で講演者のパメラさんが迎えられた。壇上のスクリーンには、生前のグロリアさんが愛犬とともに映っている写真が大きく映し出されていた（おなじ写真は、パメラさんの著書の90～91頁の間に掲載されている）。

パメラさんは、年齢は50歳代の前半で、冷静で落ち着いた感じの、知的な印象を与える女性だった。著書を見ると、夫そして2人の娘とともに暮らし（娘たちは最近自立したようだが）、学生時代には芸術学を学び、また母グロリアと一緒にエスリン研究所（Esalen Institute：カリフォルニアにあるヒューマニスティック心理学やゲシュタルト療法の研修・研究機関）のワークショップに参加したりもしていたらしい。夫ともそうしたワークショップで出会ったようだ。しかし会場の聴衆からの「あなたと心理学との関係は？」との質問には、「何か起こったらセラピーを受けるかもしれない、ただそれだけの関係です」と静かに笑顔で答えていた（彼女の著書には、学生時代に心理学を学ぼうとしたこともあったが、母のフィルムをめぐる好奇の眼差しや中傷などもあって、途中から芸術学に転向したと書かれている）。

講演の冒頭でパメラさんは、今回の国際会議に参加して講演を行うことや著書を出版することについてとても迷い、ためらった時期もあったが、亡き母グロリアへの様々な誤解や偏見、中傷などが正しいものではないことを明らかにしたかった、フィルムの公開後も母はひとりのアメリカ人女性として——幸せだったこともあり、不幸だったこともあったが——人生を生きたにもかかわらず、あのフィルムをとおしてのみ母のことを語る人たちのことが許せなかった、本当の母の姿を知ってほしいと思い勇気を出して講演と著書の執筆を引き受けることにした、と語っていた。パメラさんが今回のようなチャレンジに取り組むことを勧め、励ましたのはジョン・シュリーン（John Shlien）をはじめとしたロジャーズのもとで学んだセラピストや研究者たちであり、2004年よりパメラさんを交えて「グロリア・プロジェクト」という研究会が開かれてきたとのことだった。

英語での講演ということで、私にはパメラさんの話のすべてが理解できたわけではなかったが、彼女が伝えようとした内容の重さや深刻さは、その語りや表情をとおしてひしひしと伝わってきた。しかもその内容は、心理臨床の研究や実践に携わり、またフィルム「グロリアと3人のセラピスト」を視聴して様々な議論をしてきたわれわれ——もちろん私もその当事者のひとりである——に、大きな感動と同時に、深い反省の気持ちをもたらすものであった。講演でのメッセージとおなじ趣旨の文章が彼女の著書のなかにしたためられているので、それを引用する。

心理学者たちや大学教授たちは、グロリアが必要とし、望み、可能であったものは何だったのかについて、彼らが考えたことにしたがってそのフィルムを分析しました。学校で教師や生徒たちは意見を作りだし（いったい彼らに何ができたのでしょうか？）、いろんな側面を洗い出し、グロリアにとって最善の治療的アプローチは何だったのか答えを出そうとしました。・・・（中略）・・・そのような間にも、グロリアは成長し、変化し、生きていました。彼女は真に生きていました。そして、真に生きていたとは、彼女が生きていたことそのものなのです。（pp.66-67、太

字は原文ではイタリック体、以下同様)

パメラさんのメッセージは、端的に言えば、心理学者や大学教授たちが学問という権威のもとにフィルムのなかのグロリアを分析し、また大学や学校の授業のなかではこのフィルムが学生たちのディスカッションやディベートの材料として利用されたりしてきたけれども、それがグロリア本人やその家族にとってどのような意味をもっていたのか考えたことがあるのだろうか？ というものであった。大切なのは、フィルム制作後も生きていて、成長し変化していたグロリアがいたということであり、それに目を向けないフィルムの分析やディスカッションは、人間の本当の生の姿から乖離したものになってしまう、ということである。そして実際に、そのような乖離から様々な誤解や中傷などが生まれてきたのである。

グロリアへの誤解や偏見、中傷とはどういったものだったのか。パメラさんによれば、フィルムの公開直後よりグロリアのもとにはフィルムのなかで受けた心理療法についての感想やコメントを求める依頼が頻繁にあったらしい。グロリアがそうした要求や注文に直接答えることはほとんどなかったが、逆に世間ではグロリアおよびフィルムへの関心は高まることはあっても、なくなることはなかった。そうしたなかで、フィルムでグロリアを見た専門家やジャーナリストたちは、彼女の病理や問題を様々に分析したり、論評したりしてきたのである。たとえば様々な名称の神経症、あるいは依存症、さらには色情症やパーソナリティ障害といった診断名がグロリアにつけられたりした。また、晩年のグロリアがワークショップで知り合った女性とルームシェアによって暮らしていた事実を知ったある研究者によって、彼女がレズビアンだったのではないかという暴露本めいた著作が出版されたりもした (Katsekas, 2002)。

グロリアの死をめぐっても誤った風評がささやかれてきた。彼女がビデオの収録の15年後 (1979年) に亡くなったことは、ロジャーズの手記 (Rogers, 1984、資料 (3) 参照) によって知られることになったが、ロジャーズが彼女のプライバシーを守るために死因の詳細を書かなかったことが逆に災いしたのか、グロリアが自殺で亡くなったかのようなうわさを流した人たちもいたようだ。グロリアの死因については、肺癌であったとする文献 (Kirschenbaum, 2007, p.324) もあるが、パメラさんによれば、自分の病気による死を悟ったグロリアが診断を拒否したため (資料 (2) 参照) 死因は不明であるとのことだった。いずれにしてもグロリアの死因が自殺ではなく、病気であったことは間違いない事実である。

また、このフィルムをめぐる好奇の眼差しやうわさ、中傷はグロリア個人にとどまらず、パメラさんをはじめとする家族にも向けられた。グロリアの死後、今度はパメラさんに対して、フィルム収録後のグロリアの人生やパメラさん自身のフィルムへのコメントを求める依頼や連絡がたびたび

寄せられるようになった。講演のなかでは、パメラさんの2人の娘に対しても「パミーの娘」、「グロリアの孫娘」といった好奇の視線が寄せられることがあったと彼女は語っていた。パメラさんは、あのフィルムの映像だけを見て母グロリアや私たち家族について様々な詮索や議論をするのではなく、自分の著作を読んだうえでグロリアとその家族のことを理解してほしいと繰り返し述べていた。

1時間半のパメラさんの講演の時間は、静かに淡々と、しかしとても深く重いメッセージを私たちに届けながら過ぎていった。パメラさんは感情的になることも、取り乱したり、攻撃的になるようなこともまったくなかったが、母グロリアと彼女たち家族が経験してきたことの重さは十分に伝わってきた。

講演の終了後、壇上から降りてきたパメラさんのもとには、彼女の著書にサインを求める数人の人たちの列ができた。私もその最後尾に並び、順番が回ってきたときに、「日本でもとても多くの学生や研究者、実践家があなたのお母さんのフィルムを見ています」と告げた。パメラさんは少し笑顔を浮かべて、「事実を教えてください、ありがとうございます」と応えてくれた。その笑顔には彼女の人間的なあたたかさや優しさを感じられた。と同時に、このごく短い会話のなかにもとても重く複雑な意味や、これから私たちが取り組んでいかねばならない課題がたくさん含まれていることを私は感じざるをえなかった。

3. パメラさんの著書『グロリアのフィルムとともに生きて』より

パメラさんの著書「グロリアのフィルムとともに生きて (*Living with 'The Gloria Films'*)」(Burry, Pamela J., 2008)は、国際会議PCE2008の講演にあわせて出版されたパメラさんの書き下ろしの本であり、2004年より続けられてきた彼女とロジャーズ派の研究者たちによる「グロリア・プロジェクト」のひとつの成果である。

しかも、パメラさんの講演からわかったことだが、この本は、グロリアの娘パメラがフィルムにまつわる母の思い出について書いたものであるという以上に、母グロリアの意志を直接に受け継ぐものでもあったのである。グロリアにとってフィルム「グロリアと3人のセラピスト」がもっていた意味や、それが彼女の人生に与えた影響は、私たちが想像する以上に大きかったようで、グロリアはこのフィルムのことを含めた自叙伝を執筆する計画を立てていたらしい(資料(1)の注記を参照)。しかし、突然の病と死によってグロリアの願いは遂げられなかった。パメラさんによる今回の著書は、そのグロリアが達成できなかった意志——グロリア・フィルムの経験とその後の彼女の人生や成長について真実を伝えること——を娘であるパメラさんが受け継ぎ、実現させるものだったのである。

パメラさんのこの著書については日本語訳の一日も早い出版が待たれるが、ここでは重要な点に絞ってその内容のいくつかを紹介し、若干の検討を加えてみたい。

まず、この著作に記述された、グロリアの人生やフィルム制作をめぐるこれまで不明確だった事実関係について要約しておこう。

グロリアはポーランド系アメリカ人の家庭スジマンスキー (Szymanski) 家の四女 (7人きょうだいの5番め) として1933年10月31日に生まれている。1953年に最初の夫ビル (Bill) と結婚、二人の間には長女パメラ、長男スキップ (Skip)、次女トニー (Toni) が生まれた。しかしグロリアとビルは1964年 (フィルムが収録された年) に離婚 (ビルは翌年にカリフォルニア州ワッツで起きた人種問題の暴動に巻き込まれて命を落としている)。

1964年にフィルム「グロリアと3人のセラピスト」が制作されたが、その経緯はつぎのようなものだったらしい。グロリアは離婚を前にその前年からビルと別居し、子どもたちとの生活を始めた。そのようななかで長女のパメラが夜遅くまで起きていて、いろいろなこと (読書や趣味など) をやるようになったため、心配したグロリアが近所の人たちに相談したところ、ある人から「セラピーが必要よ!」と言われた。そこでグロリアは児童心理療法家のミリアム・ショストロム (Miriam Shostrom) のところにパメラを連れて行き、グロリアもミリアムの夫でセラピストのエヴァレット・ショストロムに親面接を受けることになった。著書のなかでパメラさんは、うまくいかなかった両親の長子としていろいろと複雑な経験はしていたけれども、「そうしたことがあったとしても、私は正常だったと思います」(p.53) と書いている。また、ミリアム・ショストロムのところでのアセスメントやセラピーは、パメラさんにとってあまり心地よい経験ではなかったこともしたためられている。しかし、こうしたことがきっかけとなって、グロリアとその家族は心理療法にかかわるようになり、そしてフィルムの制作者ショストロムと出会うことになったのである。パメラさんは、母グロリアがあこのフィルムに出演することになるきっかけを、ある意味で自分が作ってしまったことに、いまでも申し訳なさや複雑な思いを抱いているようである。

詳細は不明だが、グロリアが残したコメント (資料 (1) を参照) にあるように、ショストロム夫妻のところでのグロリア親子のセラピーは、期間あるいは回数が限定されていたものだったらしく、十分な成果をグロリア親子にもたらし終結に至ったわけではなかったようだ。しかし、おそらくエヴァレット・ショストロムにとってグロリアは印象に残るクライアントだったのだろう。彼は、史上初めての企画である心理療法のデモンストレーション・フィルムのクライアント役としてグロリアに白羽の矢を立てた。

ここで留意しなければならないのは、グロリアは娘パメラのことを心配して心理療法家のもとを訪れ、自らも親面接を受けた経験をもつクライアントではあったけれども、自分の手にあまるよう

な何らかの症状や問題行動を抱えた「病める人」ではなかった、ということである。彼女がロジャーズとの面接のなかで、これまでも心理療法を受けた経験があるということを率直に語っていたため、このフィルムをみた多くの人は、彼女が何らかの問題を抱えており、心理療法を受ける必然性を有する人であるかのように受け取ってしまいがちだったのではないだろうか。

これも詳細は不明だが、グロリアのコメントを読むかぎりでは、ショストロムをはじめとした制作関係者からグロリアに対して、フィルム制作についての事前の説明やプライバシー保護に関するインフォームド・コンセントなどは行われなかったようである。グロリアは自分が「どのくらいリアルでいられるかためして」(資料 (1) 参照) みようという決心によって面接に臨んだ。したがって、フィルムのなかで語られたことは、演技や脚色などまったくなく、すべてがグロリアにとってのリアルな事実だったのである。このことは、いまでもまったく色あせないこのフィルムの臨場感や、その後のグロリアとロジャーズの関係に見出せるような真実のエピソードを生み出した一方で、グロリア自身にとっては、あまりに無防備なありのままの姿がフィルムに刻み込まれることになったのである。

フィルムが公開されるようになった後に、グロリアがそれを見る機会はとくに与えられなかったようである。ロジャーズの手記(資料 (3))にあるように、このフィルムを入手したロジャーズが、西部行動科学研究所のワークショップでそれを視聴するプログラムを企画したところ、グロリア自身が参加を申し込んできた。そしてグロリアは、そこでパールズとの面接を見て怒りをあらわにしたのである。さらに、そのワークショップでは、ロジャーズ夫妻と昼食をともにしたグロリアが、「あなた方を精神的な両親 (parents in spirit)」だと思いたいと伝え、そこからグロリアとロジャーズ夫妻との手紙のやりとりが始まることになる、という出来事も生まれている(手紙のやりとりは、年に1~2通ではあるが、グロリアの死の直前まで15年近く続いた)。

フィルム収録後のグロリアとロジャーズの直接的な出会いは、このときの1度だけだったようだ。2人の中の、手紙をとおした人間的な関係は資料から読み取ってもらいたいだが、この間、1968年にグロリアは再婚し、また1972年には長男スキップを白血病で失っている。この時期、ロジャーズとその妻ヘレンは、グロリアにとって大きな心の支えであったようだ。ほとんど音信不通になっていたグロリアの父スタンレー (Stanley) は1974年に亡くなっているが、その父に代わってロジャーズ夫妻がグロリアの「精神的な両親」の役割を担っていたことは間違いない(グロリアは息子を失った悲しみのなか、看護師の資格を取得し、病院で働くようになっている)。ただしグロリアにとって、ロジャーズ夫妻が「精神的な両親」であったと言っても、それはあくまでも象徴的な意味であって、現実の親子の間にあるような甘えや要求のやりとりのようなものはほとんどなかったようだ。唯一の例外は、グロリアが看護学校を卒業したとき(1974年)に企画した、家族や知人たち

との卒業記念パーティにロジャーズを招待しようとしたことだけである。このときロジャーズは仕事の都合で出席することができず、お祝いの手紙を送っている。そしてその後も両者の手紙のやりとりは続いた。

グロリアは、ショストロム制作のフィルムについてはほとんど沈黙をとおしていたが、とても強いインパクトや、癒しの体験（とくにロジャーズとの）、そして怒りや不信感（とくにショストロムとパールズへの）をもち続けていたことは間違いない。ロジャーズのワークショップへの参加とロジャーズ夫妻との手紙のやりとりがグロリアの最初の行動だとすると、このフィルムに関連した彼女の2番めの動きは、ショストロムに対するフィルムの上映差し止めを求める訴訟だった。その協力者は再婚相手のジョー（Joe）であり、全米各地の映画館で上映されたり、テレビでCMが流されたりするようなフィルムの野放しの使用に対して、グロリアとジョーが立ち上がったのである。その結果、グロリアらの主張は裁判所から法律的に認められることになるが、しかしこの裁判をとおして、マスコミがグロリアのプライバシーを暴きたてる（新聞記事で彼女のファミリーネームが公表され、フルネームが知られてしまうなど）といった被害もこうむったらしい。

また、グロリアはフィルムなかで、そしてフィルム撮影直後にも、パールズから深く傷つけられた経験をしてしたが、彼女はそのことについては沈黙を続けていた。それに変化が訪れたのは、彼女がとった3番めの行動によってであった。グロリアはドリヴァー（Dolliver, R. H.）というゲシュタルト療法の研究者が求めた、フィルムでのパールズとの面接についてコメントをもらえないかとの依頼に応じたのである。そのコメントの全文が資料（1）である。それまで沈黙を守りとおしていたグロリアにどのような心境の変化があったのだろうか。パメラさんの著書によれば、グロリアは看護師としての仕事を続けるなかで、次第にホリスティックな医療に関心を寄せるようになり、瞑想や禅の道場にかよったり、パメラさんとともにエスリン研究所のワークショップに参加するようになった。そしてそういうなかで得たエンパワメントによって、自分の人生をより深く振り返るようになり、フィルムについても自叙伝を書いて真実を明らかにしようと考えようになっていったようだ。そうするなかで書かれたのがパールズとの面接についてのコメントだった。ここにはパールズとの面接で経験したグロリアの怒りと不信が包み隠さずに表現されている。また撮影直後に自分の手のひらがパールズの灰皿にされた屈辱的なエピソードについてもはじめて公表された。グロリアはホリスティック・ヘルスに関心をもち、エスリン研究所のワークショップに参加するなど、ゲシュタルト療法そのものに対しては親近感を抱いていたようだ。しかし、フィルムのなかでパールズが自分にしたことは、そのゲシュタルト療法の理念とあまりにかけ離れたものであったと彼女は言いたかったようだ。パールズへの好意的なコメントが返ってくると予想していたドリヴァーは、グロリアの文章を読んで驚いたらしいが、彼はそれにまったく修正を加えることなく、全文を彼の

論文の末尾に掲載した (Dolliver, et al., 1980)。その論文の発表はグロリアの死後のことであり、この事実を彼女が知ることはなかったが、パメラさんは、グロリアのコメントを尊重し、その後パーلزやゲシュタルト療法についての自分の考えを修正することになったドリヴァー (Dolliver, 1981) を、真の研究者に値する人だと賞賛している。

なお、フィルムでは3人のセラピストのなかで最後に登場するアルバート・エリスに関しては、グロリアによるコメントなどは残っていないようだ。グロリアにとってはそれほど強い印象や、パーلزから受けたような怒りや不信などのネガティブなインパクトは残らなかったのかもしれない。ただし、パメラさんは著書のなかで、フィルムが収録された当時、エリスが色情症についての著作を書いていた (Ellis & Sagarin, 1964)、同性愛をセラピーの治療対象であるかのような発言を行っていたこと (Ellis, 1965) などを挙げて、グロリアがフィルムで語ったことがエリスに正しく理解されていたのか疑問が残る、と指摘している (pp.85-86)。

グロリアは死の前年の1978年に、再婚相手のジョーと別居し、エスリン研究所のワークショップで知り合ったシドル (Sydelle) という女性とルームシェアをするようになった。グロリアはガーデニングや旅行などを楽しんでいたが、そのグロリアを突然に病がおそい、自らの死を悟った彼女は、診断や治療を拒否して最後の静かな日々を送ることになった。グロリアは死を目前にしていくつかのスピリチュアルな体験をしているが、ロジャーズへの最後の手紙 (資料 (3)) にそのことがしたためられている。最後は、娘であるパメラとトニー、ルームメイトのシドルらに見守られて1979年9月に息を引き取った。享年45歳の人生だった。

以上が、パメラさんの著作からわかったグロリアの生涯と、フィルム「グロリアと3人のセラピスト」をめぐる彼女の経験や事実関係の骨子である。

つぎに、グロリアの長女であるパメラさんは、このフィルムについて、そしてこのフィルムが母グロリアやその家族に与えた影響をどのようにとらえているのか、彼女の言葉をいくつか引用してみたい。

まず、フィルムに出演し、自分や家族のことを語ったグロリアについて、パメラさんはどのように受けとめているのだろうか。また、フィルムでのグロリアの話は、演技や脚色などいっさいない事実であったと先に述べたが、その事実は、娘であるパメラさんにとってはどのような意味をもつものだったのか。

9歳の時に私は、母に父以外の人とセックスをしたことがあるのかと尋ねました。そのとき母は嘘をつきました。彼女はとても驚き、狼狽し困憊しました。母は私と向き合っていることが不愉快になり、おごりなげな答えをして、部屋の明かりを消し、あっという間に部屋から出て行きました。

した。彼女が嘘をついたのは、自分の親としてのあり方に伝統的な規準を当てはめようとしたからでした。そして彼女は、自分がした答えにも不快になったのです。以前だったら嘘をつくことが許されたような規準は、もはや意味がなくなっていたからです。その数年前、あるいは数ヶ月前だったら、彼女は嘘をつくことで我慢していたでしょう。でも、そうはできなくなっていたのです。子どもたちから“良い”母だと思われることが、すべてではなくなっていたのです。彼女は前進していましたし、新鮮な考えが生まれるときに生じる自分の内側の会話に耳を傾けようとしていました。そしてあのフィルムでの面接で、彼女は嘘をついたことを告白し、私との関係のあり方のなかに、彼女が考えていた望ましい母親やあるべき母親ではなく、彼女自身である母親を加えることを想像し始めたのです。(p.106)

このパメラさんの文章を読むと、フィルムでのグロリアの語り——とくにロジャーズに冒頭で語った内容——は、フィルム制作当時にグロリアとパメラさんとの間に生じていた正真正銘の事実であり、グロリアが（そして娘パメラも）この問題について何かとても重要なものを感じとっていたことがわかる。ロジャーズとの面接は、そのようなグロリアにとって最も重要な事柄に焦点があてられることで始まっているのである。

また、これまでも議論的になってきた「わたしには、あなたはとってもよい娘のように思えますよ」という面接でのロジャーズの発言にあらわれている、2人の関係についてのパメラさんの理解をみてみよう。

もしも転移が過去の依存の再配置であるとするなら、それは同時に、過去を正しくとらえ直す機会でもあり、関係のなかの自分自身をパターン化された見方で見てしまうことから開放されるチャンスでもある、と私は言いたいと思います。セラピストに対する感情はそのなかから生まれるものですし、その感情が明らかになり、語られ、伝えられ、そしてそれが傾聴されるときにはじめて、クライアントが自分の人生を変えたいと思う気持ちは理解され、支えられうるのです。愛着（セラピーの始まりから終わりまでの）は乗り物のようなものです。それは私たちを人生のつぎの段階へと運んでくれるものです。セラピストにその用意が**あれば**、ですが。もしもカール・ロジャーズが、グロリアの愛情を求める態度を否定的に受け取っていたとしたら、もしも彼が彼女の希求するものを見過ごしていたら、もしも彼女を哀れんだり、彼女に“神経症”であることを理解させようとしてその感情を抑えようとしたら、そのときにはどんなことが起きていたでしょうか？ 少なくとも彼女とロジャーズは、その後の関係を続けることはなかったでしょう。極端な場合には、グロリアは個人的な成長をすることができなかったか、先延ばしにしていたか

もしれません。母のそうした成長は、あのフィルムのときから始まった、と私は思っています。
(pp.105-106)

パメラさんから見て、フィルムでの経験は母グロリアの成長にとっての大きなきっかけとなったものであり、そこにはロジャーズによる、グロリアを哀れんだり、何らかの「神経症」であることを理解させるようなものとは異なる態度が支えになった、という理解をパメラさんは示している。私は、史上初めての心理療法の公開映像であるあのフィルムにおいて、最初のセラピストとして登場したロジャーズが、グロリアの主訴を何らかの神経症や依存症のようなものと受け取り、そのようなやりとりや焦点化を行っていたら、あのフィルムは「～神経症グロリア」、あるいは「～依存症グロリア」のフィルムとして語り継がれることになったのではないかと考えることがある。ロジャーズは、そのようなことは避けたかったはずだ。グロリアを尊重しようとするロジャーズの態度は、彼女が亡くなった後の手記にも一貫している。パメラさんが今回の著書ではじめて明らかにした事実を知ったうえで、ロジャーズのグロリアへの追悼の手記を読むと、彼が人間のどのような側面を大切にしようとしたセラピストであったかを深く知ることができると私は思う。

もう一点、たとえば光元 (1997) が、「わたしが治療者としてグロリアに援助するとしたら、わたしはグロリアに次の点を伝えたい。①娘に打ち明ける必要はないこと、②打ち明けることは、あなたのぎりぎりの身の守りを、自ら破壊してしまうことになりかねないし、あなた自身をさらに追い込む結果になりかねないこと、・・・(以下略)・・・」(p.107) と指摘するような、グロリアの性生活をはじめとした内面の思いを娘パミーに打ち明けるべきかどうか、という点に関するパメラさんの見解を引用しておきたい。

母の性生活についてのとるに足りない問いかけを、私がした直前か直後のことだったと思いますが、私が寝なくてはならなくなった時間に、狭いアパートの台所に行くと、グロリアはテーブルで泣いていました。そのときから、私はもはや子どもではなくなりました。・・・(中略)・・・翌日、私が台所に行くと、母がそこにいて、すべてが変化していました。私は大きくなっていたのです。・・・(中略)・・・その瞬間、私の世界の輪郭は拡張しました。」(pp.110-111)

このエピソードがフィルムの収録の前なのか後なのか、パメラさんのなかでも記憶がはっきりしないようだが、少なくとも当時9歳だった娘パミーにとって、母の内面を知ることは自分の成長にとってとても大きな出来事だったということがわかる。パメラさんの著書を読むと、母と娘それぞ

れが自分自身になっていくうえで、お互いの内面を確かめ合い、伝え合うことがいかに大切であるかが綴られている。そしてそうした表出ややりとりを精神的に支え、促進したのがロジャーズであったと言えるだろう。

資料（2）として、グロリアが死の直前にロジャーズに送った最後の手紙の抜粋を載せた（これはパメラさんの著書に引用されていたものである）。グロリアにとってロジャーズがどのような存在であったのか、グロリアとロジャーズの真の関係とはどのようなものだったのか、この手紙からその姿を読み取ることができる。

4. 資料

以下に、国際会議 PCE2008 におけるパメラさんの講演や、彼女の著書などから知ることができた関係資料を日本語に訳して収録した。フィルム「グロリアと 3 人のセラピスト」を視聴、学習する際の資料として活用してもらえれば幸いである。

資料（1）グロリアが生前に残したフィルムへのコメント

(Dolliver, R. H., et al. (1980). The art of gestalt therapy or: What are you doing with your feel now? *Psychotherapy: Theory, Research, and Practice*, 17(2), pp136-142. より)

パールズとの面接についてのグロリアのコメント

言うまでもないでしょうが、「グロリアと 3 人のセラピスト (Three Approaches to Psychotherapy)」のフィルム制作に参加したことは、私にとって普通ではない体験でした。あの場やライト、カメラ、そこにいた人たちから離れてからもずっと、私はあの日の大きなインパクトを忘れたことはありませんでした。

これまでに私はそのフィルムを何度か見ましたが、そこで実際に起きたことの多くは私の記憶から消えかかっています。ですので、現在の私のコメントはバイアスのかかった記憶によるものです。

フィルム制作の前に、私は 3 人の博士にお会いしたことはなく、それぞれの方の治療的カウンセリングのテクニックがどんなものであるのかも知りませんでした。けれども、それぞれの方のいろんな評判については他の人たちから聞いていましたし、そのことから私は、面接者としての 3 人の紳士が心理学の世界で卓越した、著明な方々であることを知っていました。

フィルム制作以前、私は何ヵ月もの時間を心理療法に費やしましたが、それは（私が参加してい

た団体の決まりによって) 形式的な意味においては終結していました。ですが当然、私の問題は未解決でしたし、私の人生が突然幸福になったわけでもなく、私には世界に自力で立ち向かう準備はできていませんでした。ただ私は、あるいは少なくとも自分で思うところの私は、人生と私を取り巻く状況に対処することはできていました。私は、私の行為をコントロールしようとする社会の外的な力に従う代わりに、自分自身の基準によって生き、自分自身の価値観に従うことのほうが、より楽になれるし、自分にとって有益であることを見出していました。

私は他者からはオープンな人間であると見られていましたし、私のリアクションはほとんどの場合、正直だと思われていました。私は、自分の成長のこうした側面を誇らしく思っていました。なぜなら、自分が状況に対してオープンに正直に反応できる時、私は最もうれしく感じていたからです。

3人のまったく違う心理学者によって、ひとりの患者であるとの見立てのもとにアプローチされたとき——しかも、それは撮影され教育的な目的のために使用されるだろうということでした——私はその状況を、自分自身へのある種の秘密のテストであると考えました。“オーケー、グロリア、どのくらいリアルでいられるかためしてみましよう。” 何の準備も説明もなく、私はライトやカメラ、制作スタッフが待つ環境のなかに入って行きました。そしてその人工的な場面には初対面の3人の男性がいましたが、私は“自分自身でいよう”とだけ自分に言い聞かせていました。本当のことを自然に話そう——これはあるテストなんだ、と。

フィルムでのパールズとの面接の間、私は自分の最も防衛的な自己や、たくさんの不信感と混乱、そして私に対するセラピストのアプローチと反応(より正確には——無反応)への疑念に気づいていました。私は攻撃されることを恐れ、自分がそのような場のなかに置かれたことにとても憤慨しました。

私がああ時点で、自分の人生に最も必要としていたものは、自分であることを許すことでした。でも、パールズとともにいた私は、ゲームを演じ、ある種の仕方で要求どおりに反応しなければならず、教えられた後に期待される答えを言うことで認められるような、そんな罠にかけられるといった悪意に満ちたどうどう巡りのなかに自分がいることを発見しました。

そのとき私は、それがなぜなのか理解できませんでしたが、自分が感じていたことが何なのかについてはたしかに気づいていました。それは、小さくて、見下され、軽んじられ、混乱させられている——全体性が欠如した私でした。ある意味で、その短いセッションの終りには、私は自分が少し破壊されたと感じていました。その20分間の出会いが(そしてそれは一つの出会いだった、と確かに感じていました) 別の友人や知人との間に起きたものだったら、私はおそらく次のように考えただろうと思います。“何て悲しいことでしょう——この人はあまりにせわしなく私の体のいろん

なパーツ（私が足を動かしていることや、肩をすぼめていること、両手の無意識的なジェスチャーなど）に目をやって分析しているのです、私そのものを見ることができないでいるんだわ”と。人の体のパーツについて、何がどこにあり、どれがその人が感じていることと関連してどんな動きをしているのかに気づくことは無意味ではないでしょうし、ボディランゲージについての知識はコミュニケーションのためのちょっとしたツールです。でも私にとって、コミュニケーションの助けになる代わりに、それが破壊のために用いられるとしたら、何の価値也没有せん。

パールズ博士は面接後のふり返りのなかで、“わたしは、最初の涙が出て来始めた時に、面接を中止しました”と述べています。なぜ彼はあの時点でセッションを中止したのだろう——私はいぶかしく思います。それは、誰が人をコントロールできるかのコンテストだったのでしょうか？ 私の涙は、私のどうでもよい一部だった、足を動かすことよりも重要ではないものだったのでしょうか？ あのセッションは、私が現在理解しているものとしてのゲシュタルト療法の真実の例だったのでしょうか？ ゲシュタルトとは全体性を意味しているのではないのでしょうか？

あのセッションの後、私はとてもショックを受けていましたし、しかもそれ以上のことが生じました。おそらく他の人にとっては、たいしたことではなかったのですが——私にとっては違いました。

一日がかりでフィルム撮影が終わったとき、明かに私たち全員は疲れていました。博士たち、秘書、プロデューサーやカメラマン、そして私は、ロビーでさよならやありがとう等を言いながら立っていました。パールズ博士が煙草を吸いながら私の近くに立ち、エリス博士とおしゃべりをしていましたが、私はふとパールズ博士が部屋を見回していることに気がつきました。すると彼は私に、“カップのような形で両手を差し出して——その手をこっちへ”と伝えるように、私に手で動きを伝えました。私は彼の求めに無意識に従いました——彼の意味するところをきちんと認識せずに。すると彼は、煙草の灰を私の手のなかにトントンと落としたのです。これがたいしたことではない？ 灰皿に間違われたことを気にしなければ——そうなのかもしれません。うーん——でも、灰皿はその足を動かすでしょうか？

パールズ博士にまったく粉々にされたのとは対照的に、私の体はカール・ロジャーズと一緒にいるときに完全に落ち着いた感じでした。ロジャーズとともにいる私は全体的で、損なわれることのない、言いかえると、ひとりの人間であると感じていました。ロジャーズが私に何かを“与えてくれた”、と言うのは正しくありません。でも、あの短い時間のなかで生じたことは、私のなかにあれからずっと生き続けています。彼はただ、私が自分の潜在力——ひとりの人間としての自分の価値——を認識できるように援助してくれました。どんなに言葉を費やしても、そのことが私にもたらした重要性をすべて表現することは不可能です。

あれから13年が経ちましたが、私はいまも自分がグロリアであることを見出しています。いまはウェイトレスでもなく、離婚した女でもありませんし、フリッツ・パールズを世界の有名な権威者としてあがめ立てたりもしませんが、疑いや恐れや不確かさを持ったグロリアであることは確かです。この年月は、自分自身についてより多くのことを学び、それによって生きることを援助してくれた、私にとって豊かな経験そのものです。こうした経験のおかげで、そして私の周囲の思いやりにあふれた人々のサポートのおかげで、私はよりよく生きています。私にとって最も大切な娘たちは、私が自分自身であることへの勇気を与えてくれましたし、私がそうでないときにも自分を信じることができるように励ましてくれました。白血病を発症した息子は、その死を通して、私に人生について計り知れないほどのことを教えてくれました。特にこの3人の子どもたちのおかげで、私は人生と自分を取り巻く世界に自分を開くことができるようになりました。学校に再び通うことは、私にとってものすごいチャレンジでした。資格を持った看護師として病院で働くことは、私のなかの虚しさを満たしてくれています。患者の方々にかかわり、その人たちの気持ちを傾聴することをおして、私には次のような問いが生まれています。“病気とは何なのだろう？ 病気としてではないとらえ方はないのだろうか？” 私は、ホリスティック・ヘルスを追求し続けています。

著者注：この論文の著者たちはグロリア（フィルムのなかのクライアント）にコンタクトを取り、この論文およびフィルムでの経験に関するコメントを彼女に求めた。彼女は、すべての個人情報や居場所は明かさないでほしいとのことだった。彼女は現在、フィルム“グロリアと3人のセラピスト（Three Approaches to Psychotherapy）”における体験を含んだ、彼女の人生に関する本を執筆中である。

資料（2）グロリアがロジャーズに最後に送った手紙の抜粋

(Burry, Pamela J. (2008) *Living with 'The Gloria Films'*.)

第8章 Looking for Carl Rogers pp.126-129.)

親愛なるカールへ

あー！ この大きなプランについて私は、自分で少しのことしかわかっていないんですけど、私は迷ってなんかいない、ということだけは事実です。

私たちがコンタクトをもつようになってずいぶん長い月日経っていますが、私はあなたの存在（presence）を感じることができますし、いまもここで座ってあなたと話しています。

奥様のヘレンさんのことを知らせていただいてありがとうございました。どうか私の親愛と安寧

をお祈りする気持ちをお受け取りください。あなたにとってとても長い間親密な間柄だった方のことですから、それが難しいのはお察しいたしますけれど。

あなたからのカードは、私の人生がとても変化したことで住所がかわってしまったため、だいぶ後になって届きました。私には平和に過ごすことが難しいのかもしれませんが——変化は最近になってあわただしく起こっています。

あー！　どんなに私は、いまこの瞬間、一緒に座ってお話したいと願っていることでしょう——話す必要のあることがとてもたくさんあるみたいです。

そうです。私はそのうちに、私の人生の意味ある出来事をあなたにたくさん語ってみたいんです。ご存知かもしれませんが、グロリア・フィルムはもはやテレビや映画館で上映することはできませんし、私はそのことを喜ばしく思っています。私はあのフィルムを本当に価値あるものだと思っていますし、心理学の動向のなかで特別な地位を占めるものだと感じています。私はあのフィルムの使われ方によって傷つけられてきました。もうやめてほしいと思います。

私の人生とすべてのことは2年前に突然変化して、ゼロになりました。私はジョーと別れ、一人で生きています。愛の証のいくつかは残されたままですが、その部屋は息をされていて、私を飲み込んでしまいます。私は自分の空間を必要としていました。でも、引っ越すことはとても正しいことと感じられたのですが、いつも罪の意識と闘っていました。特にジョーと顔をあわせたときには。私はこの1年半ほどのあいだに瞑想にとても関心をもつようになり、禅や止観の研修所に何度か通いました。私は開かれ始め、それが素敵なことであると自分で感じました。

昨年の12月、私はエスリン研究所の1週間のワークショップに参加し、ずっと瞑想しました。エスリンから帰宅したとき、私は光明——それまで感じたことのない愛と特別な豊かさ——を感じました。

そのワークショップで出会った一人の女性が私の家に少しの間滞在したのですが、その後私たちは一軒の家を一緒に借りて、家賃を分担することになりました。そしていまに至っています。

私の内面的な成長は続いていて、このシドルというルームメイトをもったことは、つらく悲しい時間を楽しいものに変えてくれました。良いサポートのシステムによって成長は生まれるということを私は認めなければなりません。

この期間はすべてとても満ち足りたものでした——私たちの家には、バラが咲く小さな庭があって、そこで何種類かの作物、えんどう豆やトマトなども育てています。私はガーデニングが大好きです。園芸の教室に通い、質問に答えてもらったりしています。家の内でも外でも、私たちは一緒にいて、それはとても素敵なことです……

(グロリアは、自分の命がそれほど長くはないことを、この手紙の6ページ以降でしたためています。——パメラさんによる解説)

驚くべきことに、カール、このすべてのことは特別な贈り物のように感じています。私は自分のとても重要な出来事をどのように感じているかを、ここで書かなくてなりません。

私は娘たちとオープンに話し、私にとって必要なことを共有しています。そして娘たちが、私が以前と変わっていることをしている——または、まったく逆のことをしている——と感じたときには、私を励まし、私が何をしたらよいか導いてくれます。

私が病院から外に出たその日、私はとても全体 (WHOLE) を感じていましたし、平和な気持ちでした。と言うのも、私はその日で自分が患者、あるいは看護師のいずれとしても病院にいるのは最後だ、と確信したからです。

これが私の人生の最後の局面であり、とても重要な段階になることを、シドル、パミー、トニーにオープンに伝えました。それはとても特別なことでした。

カール、この数週間の間に私に起こったさまざまな経験を日常の言葉であなたにお話しできればと思っていますが——あまりに突然のことだったので——うまく言葉にならないかもしれません。

ある日、私のなかで奇跡的な出産が生じました。それは驚くべきもので、とてもつらく、そしてたいへんなことでしたが、シドルとパミーが私のそばにいてくれたので、私は——ある意味でそう言えると思いますが——グロリアを誕生させることができたのです。生みの苦しみと、あらゆる身体的な感情を味わいながら。

その3日後、スキッパーが私のところにやってきました。白血病で7年前に他界した、私の息子スキップのことを覚えていらっしゃるでしょう。ええ、手紙に書くのはとても難しいことですが、共有していただきたいと思っていますので、書いてみます。

私はとても衰弱し困憊していましたが、娘たちに重要なことを話さなければならないと思い、彼女たちを居間に呼びました。そしてスキップの声と表情、スキップ自身の言葉で、‘このとても重要な教え’を2時間にわたって、私は泣きながら伝えました。その教えとは、まずわがまま (Be selfish) になること、そして自分自身の要求を満たすこと、もしも僕に何かを与えたいとか祈りたいとか、僕に光を与えたいとか思っているのなら、僕がどんなに何かにすがりたいとか、誰かを求めたいと思ったとしても——僕は自分の道を歩んでいくための力と導きを求めているだけなんだ、ということを知ってもらわなくてはいけない、と。

カール、こんなことのすべてが私に生じましたが、それは自分の意識的な努力やコントロールによってではなかったのです。そして私は、その教えに確信をもつまでは、話さないでいたのです。

教えに確信をもって以来、私は何が起こったのか悟りました。

私はあたかも、このとても特別な旅の、特別なガイドをしているかのように感じています。そして私は、これほど全体的で神聖に感じたことはこれまでありませんでした。

病院から自宅へ戻ったその日に撮った写真を何枚か同封しました。その日、娘たちとシドルは私の自立を祝う親愛なる友人としてスモールグループを作ってくれました。そこに表現されていることに目を凝らすと、その写真からは、私たちが愛情や親密さや特別な時間を素敵に共有したことなどがわかっていただけたと思います……

ええ、カール、私はいまあなたと一緒に座っていると思います。そしていまこの瞬間、私は手紙というよりも一冊の本を書き終えたかのようにとても疲れています……

(1979年8月、ロジャーズへの手紙)

資料 (3) グロリアが亡くなった後に書かれたロジャーズの手記

(Rogers C. R. (1984). Gloria: A historical note. In Levant, R. F., & Shlien J. M. (Eds.)

Client-Centered Therapy and the Person-Centered Approach:

New Directions in Theory, Research, and Practice. New York; Praeger, pp.423-425.)

グロリア——ひとつの歴史的な手記

カール・ロジャーズ

何年にもわたって、私は国内外いたるところの学生たちや専門家たちから、「グロリアについてのその後の情報はないのですか？」と尋ねられてきた。彼らや彼女たちは、私とフリッツ・パールズ、アルバート・エリスが1964年にグロリアと面接をおこなったフィルムを見て、とても心を動かされ刺激を受けていた。その3人のセラピストによる彼女との面接は、すべて一日で収録されたものだった。

私は、そうした数多くの質問に、おそらくは何百回にもわたって答えてきた。驚くべきことに、そのフィルムは今でも（カウンセリングや心理療法の）教育のなかでものすごく使用され続けている。だからこそあえて言うのだが、私はそうした質問にはもうこれ以上答えたくないと思っている。

グロリアは亡くなるまでの10年ほどの間に、私と手紙のやりとりを続けた——およそ年に1～2回の頻度で。私が彼女から受け取った最後の手紙は、彼女の早すぎる死の直前のものだった。それ

は、フィルムに収録された面接から15年後のことである。

私は、彼女のプライバシーに触れずに、私たちの断続的だったけれど親密な関係を示す出来事のハイライトのいくつかを記しておきたい。それらは、彼女が成熟し、人生に対処する能力を身につけ、真の自己になっていった過程を明らかに示すものである。

あの面接が収録されて1年かもう少し後に、当時私が所属していた西部行動科学研究所において、私を中心としたウィークエンドの会合を開催することになった。ある日、参加受付の担当者が私のところに来て、「グロリアという人がワークショップに予約されていますが、あのグロリアさんでしょうか？」と言った。私は書類を見て、それがグロリアであることを確認し、彼女に手紙を送った。ワークショップでは、あの3人のセラピストのフィルムを視聴することを予定しており、個人的には参加を歓迎しているが、多くの参加者の話題になることで不快な思いをされるのではと懸念している、と。結局グロリアはワークショップに参加した。私は、そのグループでの体験は彼女にとって不快なものだったろうと思っている。しかし、そのウィークエンドの間に、2つの注目すべき体験が起こった。

フリッツ・パールズとの面接を視聴した後で、グロリアは100名を超える人びとのなかで立ち上がり、明らかに何かを言いたがっていた。彼女の表情は真っ赤で、彼女がとても怒っていることはすぐにわかった。「なぜ彼が私にさせようとしたあんなことを、私はしてしまったのでしょうか！なぜ私は、彼が私に対してあんなことをするようにさせてしまったのでしょうか！」と彼女は言った。彼女は、自分のパワーが奪い取られ、そのことがとても腹立たしいと感じていた。彼女は、その面接によい感じをまったくもっていない、ということをはっきりと述べていた。

彼女のこうしたリアクションは、その場にいた人々の特別な関心呼んだ。と言うのも、そのフィルムの最後の場面で、彼女はまったく違った意見を表明していたからである。そのフィルムで彼女は、3人のセラピストについてのコメントを求められた。彼女は、自分がはじめてセラピーを受けるのであれば私（ロジャーズ）とやってみたいが、今のような状況だとパールズ博士の刺激的なやり方が自分には最も適していると思う、と語っていた。なので、フィルムを見て面接を追体験したときに、彼女がパールズ博士から受けた支配や、自分の力の放棄を黙認してしまったことに対して反発を表明したことで、周囲はいささか驚いたのである。

私が記しておきたい、そのウィークエンドに起きた2つめの出来事は、私と妻とグロリアの3人で昼食をとった時のことである。私は、彼女がその後どうしているのかを教えてもらいたいと思って、彼女を昼食に誘った。彼女とヘレンはすぐに意気投合し（ヘレンの他者への関心はまるで磁石のようだったから）、私たちはとても楽しく居心地よい昼食の時間を過ごした。別れようとしたときに、グロリアはひとつお聞きしてもよいですか、と言った。拒否されるかもしれませんが、私は

あなた方を精神的な両親（parents in spirit）と思いたい、と。私たちには、グロリアがほんとうにいてもらいたかったような両親として私たちのことを見たい、と言っているということが理解できた。私たちはグロリアに、あなたの人生のそのような立場に置いてもらってとても嬉しく光栄です、と答えた。彼女もあたたかい感情を私たちに返してくれた。

その後何年にもわたって、彼女は私に彼女の人生についてのいろんなことを手紙に書いて送ってくれたが、私はその内容をここで明らかにしようとは思わない。私に言えるのは、彼女にはとてもよいときがあったし、家族の病気といった悲しいときもあったし、そして彼女は、いろんな経験をしながら感受性や知性や勇気を発揮していた、ということである。私は、彼女が困難のなかでもオープンであったことを知って、とても豊かな気持ちにさせられた。私はいまも彼女からの手紙をよく読み返す。

私は、以上のことから、人々があの面接を見たときに、私とグロリアとの最後のやりとりの部分を知って、より多くのことを得るだろうと信じている。私は、わずか30分の時間でつくられた関係——そのなかで私たちは人（persons）として真に出会った——の特質が、この15年もの交流を生み出したという事実に畏敬の念を覚えずにはいられない。30分という時間でさえも、ある人生のなかに違いをつくり出せるという事実を知ることができたのはすばらしいことである。

資料（4）グロリア関連年表

（Burry, Pamela J. (2008) *Living with 'The Gloria Films'*. の巻末年表より抜粋）

1933

10月21日、グロリア誕生（スジマンスキー家の7人きょうだいの5番目、四女として）

1951

グロリア、高校を卒業

1953

グロリア、ビルと結婚

1954

私、パメラ（パミー）誕生

1956

弟スキップ誕生

1960

妹トニー誕生

1961

私（パメラ）がグロリアの洋服ダンスから‘セックスの本’を盗む

1963

私はミリアム・ショストロムに、グロリアはエヴァレット・ショストロムにセラピーを受ける

1964

グロリアとビル、離婚

グロリア、ステーキハウスでウェイトレスの職を得る

「グロリアと3人のセラピスト」撮影

1965

父ビル死去

1966

カール・ロジャーズが妻のヘレンとフランス滞在中にグロリアに手紙を送る

1968

グロリア、ジョーと再婚

1970

スキップ、白血病と診断される

グロリア、看護師の事前教育に通う

1971

私（パメラ）が初めて「グロリアと3人のセラピスト」をみる

1972

スキップ死去

1974

グロリア、看護学校を卒業

グロリアの父、スタンレー・スジマンスキー死去

グロリア、病院に勤務

1975

グロリア、東洋思想に傾倒

1976

グロリア、瞑想を始める

1977

グロリア、自叙伝のためのノートをとりはじめる

1978

グロリア、パールズとの面接のコメントを書く

グロリアとジョー、別居

グロリア、止観や禅に打ち込む

1979

グロリア体調を崩す（診断は不明）、病院を退職、治療を拒否、ホリスティック・マッサージの資格を得る

ヘレン・ロジャーズ死去

グロリア死去（9月）

1980

私（パメラ）とレオン、結婚

1982

グロリアの最初の孫、アッシュ誕生

1986

グロリアの2人目の孫、リヴ誕生

1987

カール・ロジャーズ死去

1992

エヴァレット・ショストロム死去

2004

グロリア・プロジェクト始まる

<参考文献>

Burphy, Pamela J. (2008) *Living with 'The Gloria Films'*. Ross-On-Wye: PCCS Books.

Dolliver, R. H. (1981) Some limitations in Perls' gestalt therapy. *Psychotherapy: Theory, Research, and Practice*, 18 (1), pp.38-45.

Dolliver, R. H., Williams, E. L. & Gold, D. C. (1980) The art of gestalt therapy or: What are you doing with your feel now? *Psychotherapy: Theory, Research, and Practice*, 17(2), pp.136-142.

Ellis, A. (1965) *Homosexuality: Its Causes and Cures*. New York: Lyle Stuart.

Ellis, A. & Sagarin E. (1964) *Nymphomania: A Study of the Oversexed Woman*. New York: Gilbert Press.

Katsekas, B. (2002) *Gloria as a Lesbian: A Revisitation of 'Three Approaches to Psychotherapy'*. University of

Southern Maine.

Kirschenbaum, H. (2007) *The Life and Work of Carl Rogers*. Ross-On-Wye: PCCS Books.

光元和憲 (1997) 内省心理療法入門 山王出版

Perls, F. (1969) *Gestalt Therapy Verbatim*. Lafayette, CA: Real People Press.

Rogers, C. R. (1984). Gloria : A historical note. In Levant, R. F., & Shlien J. M. (Eds.) *Client-Centered Therapy and the Person-Centered Approach: New Directions in Theory, Research, and Practice*. New York; Praeger, pp.423-425.

Rogers, C. R. & Wood, J. K. (1974) Client-centered theory: Carl Rogers. In A. Burton (Ed.), *Operational Theories of Personality*. New York: Brunner/Mazel. pp.211-258.

佐治守夫・平木典子・都留春夫訳 (1980) グロリアと 3 人のセラピスト：トランスクリプト (日本語訳) 日本・精神技術研究所

Shostrom, E. (1965) *Three Approaches to Psychotherapy*. (Motion pictures). Corena del Mar, CA: Psychological Films Inc.

Weinrach, S. (1988) *Rogers and Gloria: A Microskills Analysis*. Department of Education and Human Services, Villanova University, PA.

Weinrach, S. (1991) Rogers' encounter with Gloria: What did Rogers know and when? *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training*, 28(3), pp.504-506.

<注>

- 1) このフィルムの日本語版は「グロリアと3人のセラピスト」の邦題で、(株)日本・精神技術研究所より制作・販売されている。また、そのトランスクリプトの日本語訳は、同研究所より佐治ほか訳 (1980) として発行されている。ちなみに、ロジャーズとグロリアの面接については、原語 (英語) のトランスクリプトがRogers & Wood (1974) に掲載されている。
- 2) このデモンストレーション・フィルムにおける3人のセラピスト (特にロジャーズ) のグロリアへのアプローチ、さらにはフィルム収録後のグロリアとロジャーズの関係については、これまでに様々な議論や解釈が行われてきた (Weinrach, 1988, 1991等を参照)。

その理由のひとつは、ロジャーズとグロリアの面接の終盤に、2人の間でつぎのようなやりとりが交わされたことにある。

グロリア⁵⁶ はい、それに、わたしが、今、ほかのことを考えているのがおわかりですか、
変なことです、今、なんか先生とお話している間に、突然わたしは、「まあ、私はずい

分うまく先生と話しできているなあ、先生にわたしを認めて欲しいなあ、先生は尊敬できるなあ」と思っているんです。そして、わたしの父が先生のようにわたしに話すことができなかったことを、とっても残念に思うんです。「ああ、先生が父の代りであつたらよかったのに」といいたいということなんです。どうしてそんな考えが出て来たのかわかりませんが・・・

ロジャーズ⁵⁷ わたしには、あなたはとってもよい娘のように思えますよ。

(佐治ほか訳、1980、pp.18-19)

ロジャーズ自身はこのやりとりに関して、面接終了後の振り返りにおいてつぎのようにコメントしていた。

面接の終わり頃に、グロリアが、わたしを自分の理想の父親として見ていると語ったことで、わたしは純粋に感動し、またそれを表現したと思います。わたしの反応も全く自発的なものであって、彼女は本当にいい娘だと思いました。感情転移とか逆転移とかいう言葉でいま述べたような体験を呼ぶことができますが、わたしは本当の関係の世界について、言葉の遊びをしているだけのような気がします。わたしはその体験を極めて深く感じるのです。もちろん、このような体験について、転移・逆転移といった高度に知的な枠組でいい表わすことはできると思います。しかし、もしそうするならば、そのとき、その瞬間の中に存在する直接的な「我と汝」の質というポイントが失われてしまうといいたいのです。グロリアとわたしは、出会いの体験をもちましたし、ささやかながら、永続性のある豊かな体験を得ました。(同上、pp.21-22)

しかしこうしたロジャーズのコメントに反して、グロリアとロジャーズの転移・逆転移関係を指摘する議論や分析がこれまでしばしば行われてきた。また、フィルム収録後にグロリアとロジャーズが再会しており、その後2人の間には手紙のやりとりなどの交流があったということがロジャーズの手記 (Rogers, 1984) からわかっているが、こうした2人のプライベートな交流をめぐっても、これまで様々な解釈や憶測や行われてきた。たとえば日本においても、光元 (1997) はつぎのように論じている。

・・・わたしは、グロリアに対するロジャースの治療面接は、主訴の把握においても（第一の失敗）、またグロリアの病理の理解においても（第二の失敗）、そして治療的介入におい

でも（第三の失敗）、すべてことごとく失敗していると結論づけざるを得ない。・・・（中略）・・・その後の経過に関するロジャースの報告はこんなふうである。面接のあった1、2年後のこと、あるワークショップでグロリアはロジャースと再会する。ロジャースのほうは夫婦でワークショップに参加していて、ロジャースの誘いで三人は昼食を共にする機会を得た。その別れ際にグロリアは、夫婦に「お二人をわたしの心の親（parents in spirit）と思わせていただいて、いいでしょうか」と頼んだと言う。二人はこれを快く引き受けたと、ロジャースは伝えている。こうした出来事もはさみながら、この面接が終わって少なくとも10年間、グロリアは年に1、2回、ロジャースに手紙を寄こすという関係を継続していた。ロジャースがグロリアから最後の手紙を受け取ったのは、グロリアの「早すぎた死」（untimely death）の少し前のことで、グロリアの死は映像が作られて15年後のことであった。なお、ここでロジャースの言う「早すぎた死」とは、巷間「自殺」と伝えられているものである。死を迎えるまでの15年間も、グロリアは苦しい思いをかかえながら生き続けていたことであろうし、この「早すぎた死」はグロリアの人生を全うしたものではなかったことであろうと、わたしは考える。今流に言えば、グロリアはロジャースの“追っかけ”を続けつつ、一生を終えた節がある。わたしは、これは、グロリアの新しい依存症ではなかったかという気がする。ロジャースは、自分がグロリアに対して「わたしには、あなたはとってもよい娘のように思えますよ」と言ったことが、治療者の側の逆転移感情であることを告げていない。このことは、もともと依存症者の心理構造を持つグロリアに、じつは深刻な影響を残してしまった可能性が大いにある。（pp.122-123）

こうした光元の解釈は、心理療法の着眼点やストラテジーという面では鋭い指摘として肯けるところがないわけではないが、しかし、グロリアが「依存症」であるとしている点や、彼女の死因を「自殺」だとする俗説を援用しようとしている点など、その解釈の根拠には再検討されるべきところが少なくないと言える。